

「日韓関係史」の辺境

—朝鮮と琉球、『地図上』に描かれる関係史—

洪 琬 伸[†]

The Historical Frontier in the Relationship between Korea and Japan: Korea and the Ryukyu Islands, the History of the Relationship as it Appeared on Maps

Hong Yunshin

The history of Okinawa has not been discussed satisfactorily in Japan-Korean history. When we consider the history after the modern era, Okinawa has been recognized only as one of the prefectures belonging to Japan. However, if we consider the situation from the point of view of the region and culture, Korea and the Ryukyus were deeply related regions. The relationship between the Korean peninsula and the Ryukyu Islands continued for almost 300 years with regards to the exchange of goods, but if we include the transfer of people, such as the repatriation of “castaways at sea” in the pre-modern period, the relationship lasted for as long as the 500 years of the whole history of the Choson Dynasty. This paper reveals that Korea and the Ryukyus preserved a correct understanding even during the period after diplomatic relations had ceased. I have shown that state-level interchanges between Korea and Ryukyu weakened after the 16th century, were then discontinued after the 17 century, but actually through the repatriation of “castaways at sea,” the relationship continued until the mid-19th century, as mentioned in the 朝鮮王朝実録 (The Annals of the Choson Dynasty) and other official documents. Especially the analysis of the 天下図 (World Map) which described concepts or ideas that were widespread among the mass of Korean people during the later Choson Dynasty is a unique approach. Through these analyses, this paper points out the possibility that the fantasia of the Ryukyus accelerated among the mass of the Korean people after the state-based official interchange had ceased. The history of Choson Dynasty and the Ryukyus is the pre-modern history of Korea and Okinawa. However, the both countries were forced to experience “the end of pre-modern history” by the modern imperial Japan. This experience is deeply rooted in the “identity” of both the country and the region.

はじめに

朝鮮と琉球の関係史は、地域史的な観点から見るとペリーが琉球を訪ねるはるか前の1389年から始まっており、物の交換から考えると300年の交流史をもつ。また、「漂流民」送還という前近代における人の移動を含めると、琉球との関係は、朝鮮王朝の500年の歴史全般に及ぶものであった。ペリーが沖縄に立ち寄った時期は、既に外交文書上の両国の関係は途絶えていた時期であった。しかし、琉球に漂流、漂着し直接琉球を見た朝鮮人から口伝した物語や、知識人によって代筆された『漂流海録』、小説、地図などにより、琉球の「幻想」的なイメージが広まった時期であった可能性がある¹。

[†] 青山学院大学非常勤講師

本研究はその可能性を古文書や地図を通して分析する。

朝鮮半島において「琉球」ないしは、「沖縄」という地域は、1990年代になるまでは忘れ去られていた。分断や長期にわたる軍事政権の下、自由な現地調査ができない状況のなか、沖縄は余りにも遠い地域であった。もちろん、韓国の民俗学の分野は早くも1970年代から「琉球」の古文書に関心を示してきたが、それはあくまでも韓国の文化の「南進限界線」としての「琉球」への関係、つまり「国史」の観点に立ったものであった。それは、日本で1960年代、柳田国男の民俗学がブームであり、それが「国学」への関心であった点と類似していると言えよう。現在、韓国における沖縄に対する関心は高まっているが、それは、主に「基地の島、沖縄」と韓国の現状といった近年への関心が主で、歴史的な文脈で朝鮮と琉球がどのような関係を持ったのかについての研究は十分とは言えない²。

筆者は、1990年以降の「沖縄」についての理解をより深めるためにも、こうした朝鮮と琉球の関係を論じる必要があると考えている。朝鮮王朝時代の全期間、交流を持った「琉球」という地域は、どのようにして人々の記憶から忘れ去られて行ったのだろうか。まずは、朝鮮と沖縄両地域における「幻想化」された時代が、どのように形成されていったのかを考察する。

1. 『朝鮮王朝実録』と琉球

まず、朝鮮と琉球の関係史を考える上で、重要な一次資料として分析されてきた『朝鮮王朝実録』に関する史料集や検討方法を明らかにする。

『朝鮮王朝実録』は、朝琉関係史を検討する際に欠かせないものであるが、長期間にわたり散在していたため、琉球関連部分を探し整理するのは困難を伴う。しかし、既に、『朝鮮王朝実録』に関してはいくつもの資料集が編纂されており、本稿は以下のような資料集の成果を背景に成り立っている。

最も早い段階で編纂された資料集として嘉手納宗徳編『李朝実録琉球史料 1-3』（那覇、球陽研究会、1971～72年）がある。また、『李朝実録琉球史料 1-4』（那覇、沖縄史料館松濤書屋、1982～83年）は、嘉手納宗徳が訳注で日訳まで済ませたもので、毎巻の最初のページごとに整理された目次と年代別に朝鮮・琉球間の出来事が一目瞭然にまとめられている。

また、韓国の国史編纂委員会が刊行した『朝鮮・琉球関係史料集成』（国史編纂委員会、1998年）は、朝鮮と琉球の交流が初めて記されている『高麗史』（2件、1389年、1390年）のほか、『朝鮮王朝実録』（437件）、『備邊司謄録』（13件）、『承政院日記』（8件）の他、『經國大典』、『大典會通』、『大典讀録』、『邊例集要』、『漂人領來謄録』など、およそ13種類の韓国側の関係書籍から琉球関連部分の原文が抜粋、収録されている。本史料集には他にも、『歴代宝案』や『琉球王国評定所文書』などの琉球側の史料³や対馬、日本、中国側の史料の原文の抜粋が収録されており、朝琉関係における史料群を把握するのに役立つ。特に『朝鮮王朝実録』に関しては、437件の関連記事を年表化したものが収録されており、原文確認の手助けとなっている。本稿では『高麗史』をはじめとする原文確認に、本史料集や、関連記事の年表を活用した。

また『朝鮮王朝実録琉球史料集成』（榕樹書林、2005年）は、韓国の国史編纂委員会編の『朝鮮王朝実録』（全48冊、1986年）を底本に、琉球に関する記録を抄出した「原文編」と、それに対する日本語訳を備えた「訳注編」の資料集である。特に、本書の「訳注編」は前述の『李朝実録琉球史料』

(那覇, 松濤書屋, 1982 年～83 年) など多くの先行研究をふまえた朝琉関係史料集の結集といえるものである。また本資料集には「漂海録」などの原文の抜き書きを付録として収録している。ただ、韓国側の資料集『朝鮮・琉球関係史料集成』が朝鮮後期の憲宗(1834～1849)までの記録計 437 件の目録を備えているのに対し、日本側の『朝鮮王朝実録琉球史料集成』には、仁祖(1623～1649)までの計 368 件である。また「原文編」には琉球と直接関連のないような部分は、「略」されている部分もあるが、関連事項の前後を把握する必要がある、その場合は原文の確認が不可避な場合も生じる⁴。そこで、本論が『朝鮮王朝実録』を参照とする場合には、韓国側の資料集の目録を参考に日本側の資料集に含まれてない時代を含む原文の引用を原則とし、日本側の資料集の『訳注編』を参考にする形で検討を行った。引用の際には、本文には西暦表示を中心にし、注に『朝鮮王朝実録』に記されている年代と日時を示した上、括弧内に西暦を表示する形で統一する。なお日本では「李氏朝鮮」という語が使われる場合もしばしばあるが、「李氏朝鮮」という語については、韓国の歴史学界は古くから違和感を表明しているうえに、歴史研究の立場から考えても当時の国号であった「朝鮮」という語を使うのが妥当であると考え、「朝鮮」・「朝鮮王朝」という語を使うことにする。

朝鮮時代には、頻繁に琉球国王使が往来するようになった。朝鮮王朝と琉球間の直接外交は 1392 年から 1500 年までの 108 年間で、日本により朝鮮が侵略される 1592 年の壬辰倭乱や、琉球においては 1609 年の薩摩侵略後にも、中国の明を仲介にする間接的な外交関係を維持したことが、『朝鮮王朝実録』と『歴代宝案』から見て取れる。しかし、中国が明から清に変わる 1644 年を契機に既存の明中心の冊封体制が崩壊すると、朝鮮と琉球の間接外交も中止された⁵。研究史では、朝鮮と琉球が外交文書の交換なしに清を通した漂流民送還を行った 1695 年をもって、外交文書交換による朝琉関係に終止符が打たれたとされる。この期間まで数えても直接、間接外交を通した両国の人や物の移動はおよそ 300 年以上に及ぶものだった。しかし、『朝鮮王朝実録』のなかの琉球関連記録は、1392 年から始まり、1832 年までであるが、琉球側の史料では、『琉球王国評定所文書』の筆写版の朝鮮人関連漂着記録 3 件が『沖縄県史料 5』(沖縄県教育委員会刊, 1987 年)に収められており、1868 年の朝鮮人漂着記録まで存在したことが明らかにされている⁶。

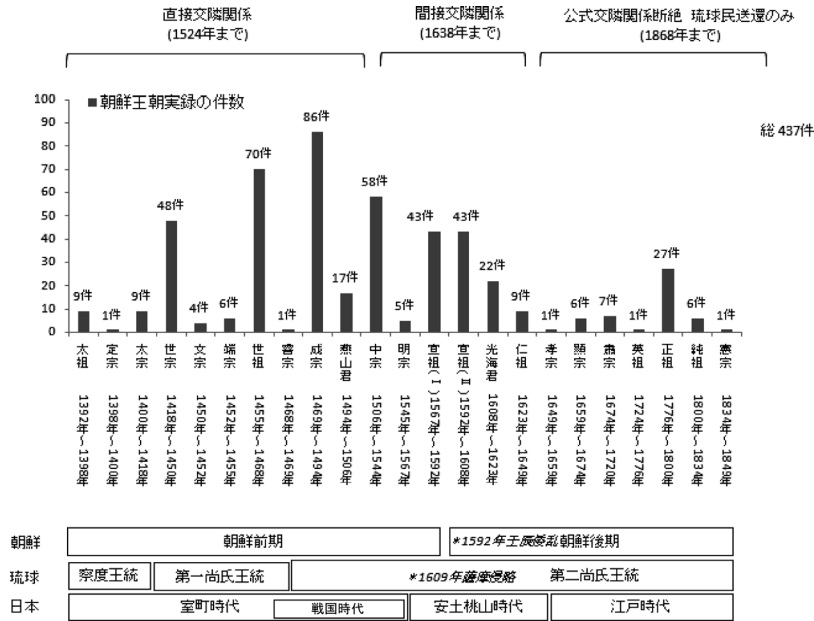
これら朝鮮王朝全期間を通して琉球に対する関心は、『朝鮮王朝実録』に表れている。韓国の国史編纂委員会が刊行した『朝鮮・琉球関係史料集成』収録の年表をもとに、『朝鮮王朝実録』に収録された琉球関連件数を表にし、朝鮮・沖縄・日本の歴史の流れを記したものが、表 I-1 である。

琉球と朝鮮の関係史は、広く朝鮮時代の全期間に及んでいることが分かる。そして、鎖国の体制の中で、台風、海流などの自然の力によって主に全羅道、済州島から琉球まで流れていった朝鮮の「ごく普通の人々」、決して身分は高くなかった彼らの存在こそ、朝鮮と琉球の関係史全般を貫いた最も長い繋がりであった。琉球と朝鮮の歴史を、また朝鮮に広まった「琉球幻想」というものを、これら「ごく普通の人々」から考えなければならない理由がそこにある。

2. 交流史の始まり「Corea」と「ゴース」

前近代における「ごく普通の人々」の交流とはどういうものであったのだろうか。まず、「Corea」と「ゴース」をめぐる物語から始めたい。朝鮮と琉球との繋がり、前近代の海路を通じた人の交流から始まる。

表 I-1 前近代における「朝鮮・琉球・沖縄」の関係図



筆者作成

交流件数に関しては『朝鮮・琉球関係史料集成』（韓国国史編纂委員会刊，1998年）収録年表参照。

韓国の英語の国号は「Korea」だが、Korea という名称は有名なマルコポーロ（1254～1324）の『東方見聞録』をはじめとする 13 世紀の西洋人が、中国から帰り道で「高麗」（Corea）という国があったことを漠然と紹介したことに起源する。高麗が滅び朝鮮王朝時代となっても朝鮮半島そのものを指す地名として「Corea」は広く伝わり、やがて、それは、近代における英語の国号となった。1594 年プランチオ（Plancio）の世界地図に初めて「Corea」という地名が見られ、16 世紀東洋の貿易を独占したポルトガル人が朝鮮半島を「Corea」と呼んだことが「航海集成録（Navigations, Voyages, Traffics and Discoveries）」（1600 年）の記録から明らかにされている⁷。

一方、ポルトガル人がはじめて中国に派遣した大使として知られ、1517 年ようやく広州港に着いたトメ・ピレスは、琉球人をゴーレスとして紹介した初の文献を残している⁸。トメ・ピレスは、「レケオ（琉球人）はゴーレスと呼ばれる」としながら、中国に朝貢を行う、独特の形の船を持ち中国とマラカで取引を行っている様子などを伝えた。トメ・ピレスは、琉球人を「正直な人間で、奴隷を買わないし、たとえ全世界とひきかえてでも自分たちの同胞を売るようなことはしない。かれらはこれについては死を賭ける」⁹と紹介している。

ところが、レケオス（Leques あるいは Lequios）は「琉球」の対音であるのに対し、ゴーレス Guores が何を意味するかについては諸説があるが、はっきりしていない¹⁰。そこで、ゴーレスに関しては、琉球人、台湾人、高麗人などではないかなどの説があり、その一つの可能性として韓国では、早くから『韓国海洋史』（1955 年）で洪以燮が、ゴーレスは、朝鮮（あるいは高麗）から琉球や台湾に漂着した人たちであるとの見方も存在すると指摘している¹¹。

「Corea」の人が「ゴース」だったと言うのだろうか。それはともあれ、13世紀から16世紀にかけて、朝鮮の多くの人が琉球にたどり着いたことは事実である。その人々が「被擄人」や「漂流民」と呼ばれる人々であった。

「被擄人」とは、主に高麗末期から朝鮮初期に至る時期、朝鮮半島と中国沿岸で活動した日本の倭寇により拉致された人々を意味する。室町時代（高麗末期）の混乱期から活動を本格化した倭寇は、米や生活用品を得るために穀物を運搬する船を襲撃し、朝鮮の沿岸の漁民を殺害あるいは売買していた。朝鮮初期には、忠清道をはじめ、全羅道、慶尚道が集中的な被害に遭い、済州島までも被害を受けた。田中健夫は、14世紀以降における奴隷貿易の実態についてはなお幾多検討すべき問題があるとしても、14、15世紀に中国の冊封体制に編入されて国際舞台に登場し、活発な南方貿易を行っていた琉球は、倭寇により捕えられた朝鮮被擄人が転売されていた市場でもあり、とりわけ那覇は東アジアにおける重要な市場であったことは疑う余地のない事実であるという¹²。朝鮮被擄人は、室町時代以来九州の国際貿易港として東アジアに開かれていた博多で売買され、薩摩、大隅、日向へ売られたのち、さらに琉球の首里まで転売されていたのである¹³。

一方、「漂流民」とは、言葉通り海流や台風などの影響で琉球に漂着した人々で、済州島付近の海域と関連があるとされている。朝鮮では冬に、日本付近を通過する低気圧による風向の変化を伴う季節風の影響で海難事故が多く発生し、一方で琉球からは台風の影響で夏、朝鮮に漂着する 경우가多かった¹⁴。そして14世紀半ば、琉球の中山王察度が、高麗にこれらの人々を送還したことで朝鮮と琉球との関係史が始まった。では、交通もそれほど発展していない前近代、琉球は何故、これらの人々を送還したのだろうか。次に、交流史の始まりを記す古文書とともにその物理的な距離を考えてみたい。

3. 朝鮮前期・朝琉交流史の開幕と「海の道」

朝鮮と琉球の関係史を示す最初の記録は、朝鮮建国の直前の高麗時代の記録である。1389年の『高麗史』に最初の記録がある。『高麗史』の「巻137 列傳卷第50 辛禍5」には、1389年8月（辛昌元年8月）琉球王中山察度が、自ら琉球を高麗の臣下と称したうえ倭寇による被擄人と朝貢品（硫黄300斤、蘇木600斤、胡椒300斤、甲20部）を献上したという記録が残されている。これに対し高麗側は同年、使者金允厚を報聘使として琉球に派遣することで答えている¹⁵。金允厚らが琉球から被擄人37人を送還してくるのは、1390年の8月（恭讓王2年）であった。中山王察度は再び玉之を随行させて「称臣奉表」している¹⁶。とりわけ、これらの記録から日本の倭寇により拉致された人々の送還により成立した両地域の関係が始まっていることが分かる。

こうして被擄人を通して始まった琉球と高麗の関係は、上記の交流の直後に誕生した朝鮮王朝時代（1392～1910）にも受け継がれた。『朝鮮王朝実録』で見られる初めての記録は、1392年8月18日、中山王察度が自らを朝鮮の臣下と称し遣使を来朝させた記録である¹⁷。朝鮮王朝の建国からわずか1カ月も経たない時期であった。以降、琉球王朝はやはり、倭寇により琉球へ連れて行かれた被擄人を送還する形で朝鮮との関係を深めていく。朝鮮王朝は500年も続いたが、琉球との本格的な関係史の始まりはこの朝鮮王朝時代であった。しかし、『朝鮮王朝実録』に残っている送還記録や漂流記によると、琉球と朝鮮との往復の道は容易なものではなかったことが伺える。

申叔舟の『海東諸国紀』（1471年）に関しては後述するが、まず、『海東諸国紀』に収録されている「琉球国記」の里数だけを見てみよう。琉球と朝鮮との距離は当時、次のような543里（朝鮮の里数では5,430里）となっている。

慶尚道 ^{ドンネ}東萊^{フサン}富山浦（48里）→対馬島 ^{トイサキ}都伊沙只（19里）→船越浦（48里）→一岐島 風本浦（5里）→毛都伊浦（13里）→肥前州 ^{モトイ}上松浦（165里）→^{エラフ}惠羅武（145里）→大島（30里）→度九島（55里）→與論島（15里）→琉球國都、である¹⁸。（ルビは引用者による）

上記の距離は、琉球からの国遣使の来朝海路を参考に作成されたものであるが、このような遠い道のりは、当時の朝鮮王朝の船舶技術ではかなりの負担を感じさせるものであったようである。特に、倭寇の活動が活発であった14世紀末からは、日本への往来は極めて困難で、朝鮮初期には風浪と倭寇の攻撃を警戒しながら往来するのに1年や2年がかかることさえあった¹⁹。既に多くの朝琉関係の先行研究によって明らかになったように、朝鮮は、経済的な影響や対外関係においてそれほど大きな影響を与えてなかった琉球との交流には消極的であった。朝鮮王朝が琉球まで使節を送ったのは、500年の歴史でたった2、3回程度であった²⁰。朝鮮への「海の道」が、転売された「被擄人」、「九死に一生」を得たものの船が壊れて漂着・漂流した人々にとってみれば、予測のつかない不確実な旅の道でもあったことは言うまでもない。

例えば、初めて琉球に通信官を派遣したのは1416年で、朝鮮王朝3代目太宗16年であったが、太宗は、国使の派遣に伴い、まず、黄喜などの官僚からの激しい反対に直面せざるを得なかった。海上の道を利用しなければならない琉球への道は遠くて、危険を伴うもので、しかも人を遣わすのは費用がかかりすぎるとの理由からであった。それを押し切って太宗は1416年（太宗16年）1月、前護軍李藝に被擄人送還を命じている²¹。琉球に派遣された李藝が、44人の被擄人とともに朝鮮に戻ったのが半年後の1416年（太宗16年）7月であった。琉球まで転売されていた朝鮮慶尚道出身の者のなかには、帰還するのに22年もかかった人がいた²²。

二度目に朝鮮から琉球に通事を遣わしたのは、1429年、朝鮮王朝4代目世宗11年のことであった。1429年の動きは朝鮮人被擄人の送還を目的としたものではなく、自然の力によって朝鮮に漂流してきた琉球人を送還することであった。琉球から15人が江原道に漂流したのは、1429年夏であった²³。琉球からの漂流民に対し朝鮮王朝は、手厚い待遇をほどこしている。禮曹は、本人たちが望めば、衣糧、土田、穀種などをも与え定着させる案も提案し²⁴、漂流民の中の一人が亡くなると、棺や紙などを与えたうえ、葬式や立標の設置を含む祭事を行うように命じている²⁵。こうやって琉球からの漂流民14人は、同年9月29日（世宗11年9月壬辰）、食べ物や衣服などの朝鮮王朝の提供したものを受け取り、帰りの経由地であった西海島日向、大隅、薩摩3州宛ての護送協力依頼の文を受け取って琉球へ向かった²⁶。通事金源珍が琉球まで同行したが、金が朝鮮に戻ったのは、翌年の12月であった²⁷。

それに対し、琉球王朝は、1431年（世宗13年）10月に琉球を訪ねた對馬の商船一隻を借り、中山王の使臣を送っている。世宗は、その訪問を漂流民送還に対する答えであると判断し朝鮮からも報聘使を送ることを提案するが、海路が遠くて危険であり、報聘使を送った前例がないこと等の朝廷の反論により思い留めている²⁸。

中山王の尚巴志の致書は、琉球にとっても海路は厳しいものであったことをうかがわせる。琉球王

朝は世宗には倭寇の活動により朝鮮まで来ることが困難であったこと、何年か前に被擄人を送還しようとしたが風がおさまらずできなかったこと、對馬の賊首六郎次郎から一隻を借りることになった経緯、琉球に留まっている約 100 人の朝鮮の被擄人は船が狭く、また風の動きも不便であったため連れてこられなかったということが書かれていた²⁹。

一方、1429 年通信使として日本に往来した朴瑞生は、博多で琉球にいる被擄人 50 人の情報を収集し報告している。朴の報告によると、琉球が米を調達するために被擄人を送還しようとしたが、風の動きが激しくそのうち国内で乱がおこり、送れなくなったとの情報を得た。朝鮮人は奴隸として転売され、あるいは、監禁されることで家族と離れ離れとなり逃げることもできない状況であった。朴瑞生はこのような状況に対する復讐を実行するためにも、同じく日本人も奴隸とし売買するべきだと主張した。朴は、日本人の 10 歳以下の男子と 20 歳以下の女性を連れてきて売買し、永遠に奴隸とすることを許可してほしいと具体的な方法までをも訴えている³⁰。

上記のような倭寇の活動は琉球と朝鮮との間の交流の障害となるものでもあったが、一方で、琉球に対する人道的な国としての印象を強めていくきっかけでもあった。また、朝鮮世宗（1418 年～1450 年）の時期は、訓民正音（ハングル）の創造に象徴されるように、文化的に著しく発展した時期であると同時に、世宗の琉球に対する関心が高かったため、朝琉交流の体制は固くなった。さらに、同時期琉球も高麗から朝鮮王朝の開幕までの時期に交流を進めてきた察度の二代に代わって、尚巴志王統（1422 年～1469 年）が 50 年間続き、海外活動や国内文化がめざましく発展した時期であった³¹。世宗は尚巴志が被擄人送還を試みたことに深く感謝の念を示し、琉球を明の冊封体制の下で「琉球国使臣」として対等な関係の国の格位で待遇することなどを提案している。世宗の意識は朝廷の閣僚たちが「琉球は日本より小国」とする立場とは異なるものであった³²。

世宗の琉球に対する関心は高いものであった。特に、倭寇の活動により拉致された被擄人の被害の報告を受け、兵船の改造に関心を持っていた世宗は、琉球の船舶技術を積極的に取り入れようとした。琉球を直接訪問したことのある李藝は禮曹を通して、中国、琉球、南蛮、日本の船が皆鉄釘を使っているなどと報告し兵船の改造を提案している³³。世宗は、琉球の船舶技術に最も興味を示し、琉球国からの船舶技術者招来のために米や豆などの食糧³⁴や月料³⁵などを提供した。実際どれだけ取り入れたのかは確かではないが、世宗は琉球の船匠たちが作った戦艦を朝鮮のものと比べながら兵船の改造に力を入れようとしている³⁶。

さらに琉球国から往来するのに対し通訳がないことの問題が指摘され、倭学生に琉球国の文の解読もともに学ばせた³⁷。こうして世宗の時に「対等の国」としての対琉球体制が確立されていった。

一方、「海の道」の遠さや、直接朝鮮の政治との関連性が弱い「小国」と認識した朝鮮朝廷の官僚たちの立場とは対照的に、琉球は朝鮮全期において 50 回近く使者を送り続けたことが先行研究によって明かにされている³⁸。朝鮮の対琉球政策が確立されて行く時期、明は海禁令（1368～1567 年）により中国商人の海上活動を禁じていた。朝鮮は被擄人や漂流民を送還してくる琉球を「対等な国」として手厚い待遇を行った。東恩納寛惇が論じているように、海禁令の下で外部勢力の自由な商業を禁じていた朝鮮王朝下で、被擄人送還は、文引〔對馬発行の朝鮮への渡航許可〕なく朝鮮を往来する口実ともなった³⁹。博多商人・對馬商人の活動が盛んで、中間者はしばしば琉球国王の偽使となって朝鮮に渡航していた。田中健夫は、交流の名目となった被擄人送還が道義上の問題であったことはい

うまでもないが、朝鮮の内政に直接関係する大問題であったため、通交に積極的にはなれないが、さりとてこれに無関心であることもない状況であったと指摘する。たとえ偽使であっても朝鮮は被擄人が送還された場合に、そのことに無関心であるわけにはいかなかったのである⁴⁰。

こうして琉球の積極的な努力により、琉球の高麗訪問時の「被擄人」送還からスタートした両地域の関係史は、朝鮮王朝時に本格化され倭寇の活動が静まると、やがて漂流民の送還へと変わり、琉球は、前述の表 I-1 でも分かるように 15 世紀から 1 世紀にわたる時期に「漂流民」送還を通じた交流のピークを迎えた⁴¹。朝鮮にとって琉球は「中国、日本、女眞の次に最も交流の多かった国」⁴² となったのである。

琉球を通して朝鮮に伝わった物品は『朝鮮王朝実録』で見られるものだけで 88 種類に至り、特産物や工芸品が 33 種類、織物類が 14 種類、薬材類や香そして植物類が 29 種類にもわたる。鯨の皮と見られるものもあるが、当時、朝鮮で武器として用いられた弓で使われた水牛角が輸入された記録もある。胡椒や蘇木は朝鮮後期まで海外の輸入に依存していた品目であった⁴³。特に、朝鮮と琉球との交流が最も盛んに行われた成宗の時（1469 年～1494 年）には琉球が献上した水牛が朝鮮での繁殖に成功した前例から、薬剤としても使っていた胡椒の国内生産が王命により試みられ⁴⁴、琉球国に遣使して胡椒の種を求めた記録が残る⁴⁵。琉球を通して、朝鮮国内で生産出来ない物品の輸入が行われた。琉球は重要な通商通路であったのである。

一方、朝鮮を通して綿布などの織物類、工芸品、朝鮮人参のほか、大蔵経や仏教書籍が多量に琉球に入るなど、朝鮮時代全期間を通して琉球との間で、遠く「海の道」を渡り、国境を越えた朝鮮と琉球の物品は約 100 種類にも及ぶ⁴⁶。朝鮮にとって琉球とは、おとぎ話のような国ではなく実存するもっとも近い国であったかもしれない。朝鮮前期に見られる関係は、物の交換や人の直接的な送還などかなり具体的である。だとすると、この実在する国について、朝鮮の人々が持つ「幻想的」なイメージはいつから広まったのだろうか。この場合、やはり鍵となるのは、「朝鮮に戻ってきた人々」、しかも奴隷として転売され厳しい状況に置かれていた被擄人ではなく、自然の力で琉球に漂着し、かつ琉球王国によって歓待され、友好的な待遇を受け帰還した人々、「漂流民」の体験が重要となる。なぜなら、朝鮮と琉球両地域で政府次元の交流が 16 世紀以降弱まり 17 世紀以降断絶されたが、「漂流民」の送還は、19 世紀半ばまで続いたためである。そして、朝鮮においての「琉球幻想」というのは、朝鮮前期というよりむしろ後期にはじまるからである。海禁体制の下で閉鎖的であった朝鮮時代において、自力で戻ることのできなかった人々を返す人道的な国としての琉球のイメージは、一般にも深く影響したことは想像に難しくない。

しかし、そのことを『朝鮮王朝実録』や知識人の書いた「漂海録」のみで論じるのは不十分である。なぜなら、朝鮮社会が徹底的な身分社会であり、一般庶民の多くは文字の読み書きが出来なかったからである。上記の文字資料とともに当時の地図を共に考慮する必要があると考えるのはそのためである。地図は、時には領土防衛のために王命により作られ、または、人々の異邦世界への好奇心を誘う抽象化されたものとして広まった場合もあった。そして両方の地図化作業に、漂流民の体験が多く反映された。文字史料と共に、朝鮮の海外地図に描かれた琉球像の変遷を辿ることによって、朝鮮前期から後期における「琉球像」の変化を考えてみよう。

4. 朝鮮前期の地理誌『海東諸国紀』のなかの「琉球像」

朝鮮王朝は、中央集権を強化するために必要な国内地図はもちろん、安全保障に対する関心から海外地図の製作に格別な努力を注いだ時期であった。

朝鮮王朝時代に作られた海外地図は主に二種類に分けることができる。ひとつは当時の地理的な知識や科学的な収集により作成したもので、安全保障上の問題などで管府が保管することが望ましいとされ、一般人が触れることは禁じられた⁴⁷。

もう一つは、「天下図」と呼ばれるもので、想像や思想の世界がやや抽象的に描かれ、伝統的な世界観を表すものである⁴⁸。これらの「天下図」は主に朝鮮後期に最も盛んになり、木版印刷術の発展とともに「輿地図」あるいは「天下地図」という題の付いた簡略な地図の書籍が一般にも広く普及した⁴⁹。朝鮮王朝時代に制作されたこの二種類の海外地図とともに、琉球関連地図が多数存在する。そして、被擄人や漂流民の見た琉球の情報が多く地図に反映されており、鎖国体制の中で外とのつながりを持たない人々に「琉球像」として普及されていった。

まず、当時としての科学的な方法で描かれた海外地図を紹介しよう。最も知られているのは、前述の1471年（成宗2年）申叔舟が王名により編纂した『海東諸国紀』に収録された「琉球国之図」である。『海東諸国紀』は朝鮮時代に作製された唯一の外国の地誌書である⁵⁰。海東諸国とは、日本本国、九州、一岐、対馬、琉球国の総称で、『海東諸国紀』はこれらの地域の地図を収録した上、国内情勢や、往来領域、使臣を接待する際の礼儀など、隣国との外交関係の大綱を詳細に記したものであった。1471年申叔舟により書かれ、琉球の情勢を明らかにした「琉球国紀」や、後に（1501年）琉球使臣による情報収集によりまとめた追加記録が付録として付け加えられている。

地図としては、「琉球国之図」「日本本国之図」（二枚）「日本国西海道九州之図」「日本国一岐之図」「日本国対馬島之図」「海東諸国總図」を含む7枚が収録されており、そのうち琉球が描かれていたのは、「琉球国之図」図I-1と、「海東諸国總図」図I-2である。「琉球国之図」には沖縄本島だけでなく周囲の約20個の島が描かれたうえ、琉球までの距離が里敷で記入されている。さらに、山脈や城の位置、有人島の有無などが記されているなど、他の地域の地図よりはるかに詳しい。それは「海東諸国總図」図I-2を見ても明らかである。「海東諸国總図」は、「琉球国之図」を含むすべての収録地図を合成し海東諸国の全貌を見られるようにしたもので、本州、四国、九州、一岐、対馬、琉球が描かれている⁵¹。また、琉球国が実際の大きさより大きく書かれてあることが一目でわかる。そして、そのことは単なる大きさではなく、『朝鮮王朝実録』に見られる日本の僧道安（博多商人）の存在の大きさや、申叔舟に地図を制作させた王朝の政策との関連性のなかで考えることが重要であろう。

琉球関連地図が収録されたのは、申叔舟が成宗の王命を受けた1471年であるが、これらの琉球関連地図の伝承由来は、1453年（端宗元年7月己未）に遡る。この年、道安は日本と琉球国の地図を朝鮮に渡した⁵²。『朝鮮王朝実録』に残された道安に関する記録は端宗から世祖までの二代王に及ぶ期間に計15件であるが、使臣個人の名を記した文書としては圧倒的な数である。世祖5年（1459年）には、漂流民を送還した道安がその帰り途で朝鮮から下賜品々と書契を、対馬により奪われたことを報告している⁵³。そのことに関して、朝鮮王朝は、対馬の「無礼」に対し嚴重な抗議を行っている記録が残り、朝鮮の道安に対する信頼がいかに深いものだったのか分かる⁵⁴。その道安が1453年（端宗元年7月己未）朝鮮に渡した「琉球王国之図」と「日本本国之図」は、ともに4部も模写され、一

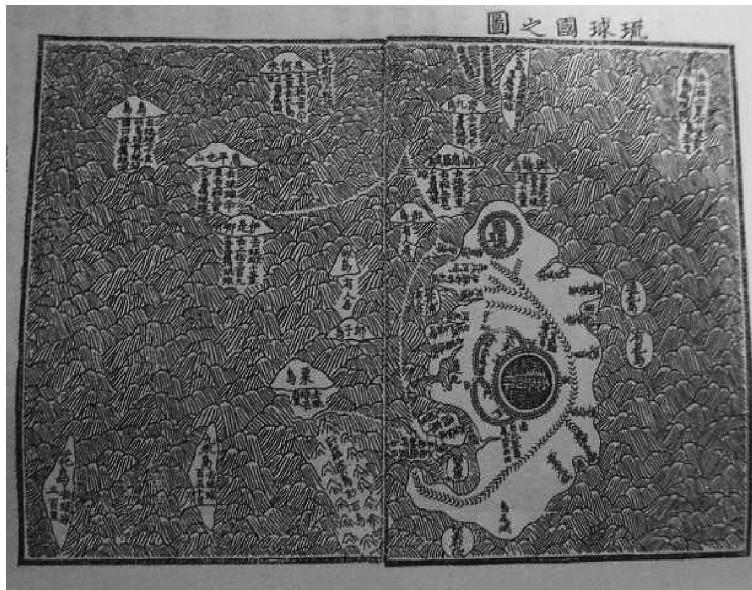


図 I-1 琉球国之図

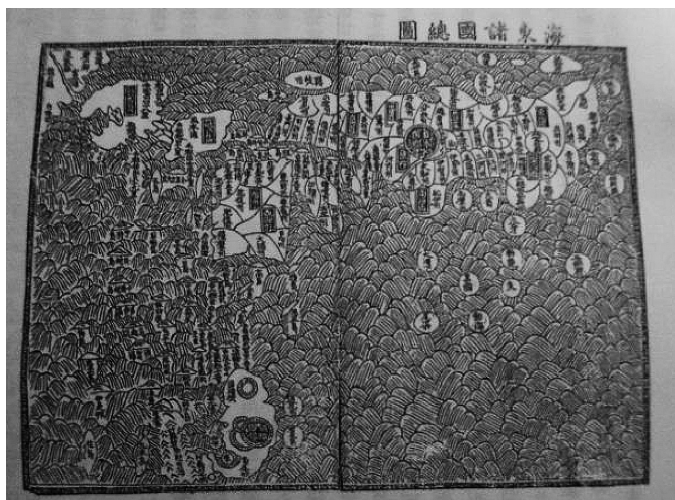


図 I-2 海東諸国總図

部は宮内に収められ、残る3部は議政府、春秋館、禮曹といった当時の朝鮮の安全保障、時政、「事大交隣（交隣関係）」を担当する官府にそれぞれ分蔵されるほど重要視された⁵⁵。

『海東諸国紀』の編纂者であった申叔舟が要職についていた頃、朝鮮王朝の琉球に対する関心は非常に高いものであった。なお申叔舟は、世宗、文宗、端宗、世祖、睿宗、成宗の6代にわたる時期に学者として、また、政治家として事大交隣政策を担っていたのである⁵⁶（表I-1参照）。

韓国の歴史学では、『海東諸国紀』が編纂されたことが成宗代の政策やその特徴として語られる場合が多い。しかし、筆者は、『海東諸国紀』は、申叔舟が要職についた世宗代からはじまる朝鮮王朝

全般における琉球王朝に対する関心とともに語らなければならないと考えている。実際、『海東諸国紀』には中世琉球語をハングルに置き換えた「語音翻訳」が収録されており、中世琉球語・朝鮮語・日本語の史料のひとつとして重視されているが、訓民正音（ハングル）を創始したのは世宗であり、申叔舟は最もハングルの創始に力を貸した学者でもあった⁵⁷。特に前述の道安の礼物を奪った対馬に対し抗議を行った世祖の時には、14年の短い王であったが、琉球からの使臣往来が活発で14回に及んでいるなど、琉球と朝鮮通交史の黄金時代でもあった⁵⁸。この時期は、地図政策に最も力を入れている時期でもある。申叔舟はこの時期、朝鮮朝廷最高権力者である議政府の領議政と禮曹の事務を兼ねており、「事大交隣」政策を担った⁵⁹。特に、対外関係を掌る禮曹は琉球からの使者はもちろん、漂流人の送還に関する業務も扱っていた⁶⁰。『朝鮮王朝実録』には、朝鮮朝廷が漂流人に書かせた漂流記が収録されており、この漂流記が琉球を知る情報源となっていたことが分かる。申叔舟はこれらの情報を最も正確に把握できる位置にあったのである。そして、『海東諸国紀』を編纂した1471年に申叔舟は佐理功臣に冊封され領議政に任命されるなど、朝鮮前期全般を考える上で、重要な人物である。『海東諸国紀』は申叔舟の一生の結晶であったといえる。

このような朝鮮王朝の最高権力者申叔舟が王命によりまとめた『海東諸国紀』に収録された「琉球国之図」や「海東諸国總図」は、朝鮮全期間にわたり基本的な地図として伝承されている。日本の江戸初期における行基図にほとんど琉球が示されなかったことと対照的である。日本の地図には、1654年になってようやく「日本国之図」で始めて一大島としての琉球が描かれるようになった。琉球をひとつ大島嶼として描き始めたことに関して、海野一隆は「まったく想像ではなく、琉球でできた図に根源があると考え、琉球と貿易が頻繁であった朝鮮の『海東諸国紀』の「琉球国之図」がその根源となっている」と見ている⁶¹。『海東諸国紀』の「琉球国之図」は少なくとも江戸幕府より183年は早いものであった。「琉球国之図」や「海東諸国總図」地図が『海東諸国紀』に収録される過程は、朝鮮王朝の琉球に対する認識を如実に表している。その関心は、前述してきたように単なる編纂命令を出した成宗に終わったのではなく、次の王である燕山は、7年（1501年）琉球使臣の朝鮮訪問に際し、国の風土、人物、世代などについての調査後、内容を補給するなど琉球と朝鮮の直接交流が行われた朝鮮前期全般に及んだ⁶²。その調査に琉球から送還されてきた漂流民の体験が反映されたのはいうまでもない。また、一部の伝写過程の間違いはあるが、朝鮮後期までこれらの地図は「琉球像」として伝承された。

5. 朝鮮後期の世界地図と「天下図」の「琉球」

世界地図で見られる琉球重視の風潮は、朝鮮と琉球との交流がそれほど盛んではなくなった18世紀の朝鮮後期までも見られる。朝鮮後期の代表的な世界地図は、現在韓国の崇實大学校の博物館に所蔵されている「輿地全図」図I-3と、韓国国立中央博物館に所蔵されている「天下大摠一覽之図」図I-4とされる⁶³。「輿地全図」は、中国（清代）や朝鮮を大きく描き、また、琉球に比重を置いた描き方が見られる世界地図である。18世紀末から19世紀になると中国地図とともに西洋の現代式地図も比較的広く知られるようになった時期で、これらの地図に朝鮮・日本・琉球を加え世界地図として編集した可能性が指摘されている。とりわけ、この地図には、中国、朝鮮、琉球が大きく描かれていることが分かる⁶⁴。特に、「天下大摠一覽之図」には、中国地図に朝鮮と琉球国を加える形で作られ

ているが、日本国は地図上にその位置と方向、距離を書き込むことにとどめているのに対し、琉球国は実際の大きさよりはるかに大きく書かれていたことが分かる。

ただし、朝鮮後期に描かれた世界地図の「琉球」は「海東諸国紀」より地名や位置などに関する精密性はむしろ衰えている。清代になって交流が途絶えていくなか、琉球は、朝鮮の安全保障を重視した科学的方法で製作された地図からは徐々に姿を消していった。それは、地図を国単位で描く傾向が強くなっていることと無関係ではないと考える。朝鮮朝廷の安全保障や対外交流を目的に作られた、いわば、当時としての科学的方法で作られた地図は、交流が途絶えるにつれ、「琉球国之図」の形は残ったものの地名や正確さは衰えてしまう結果となったのである。

しかし、一方で、琉球はむしろ抽象化された形で多く描かれ、長い間、「琉球像」として存続した。

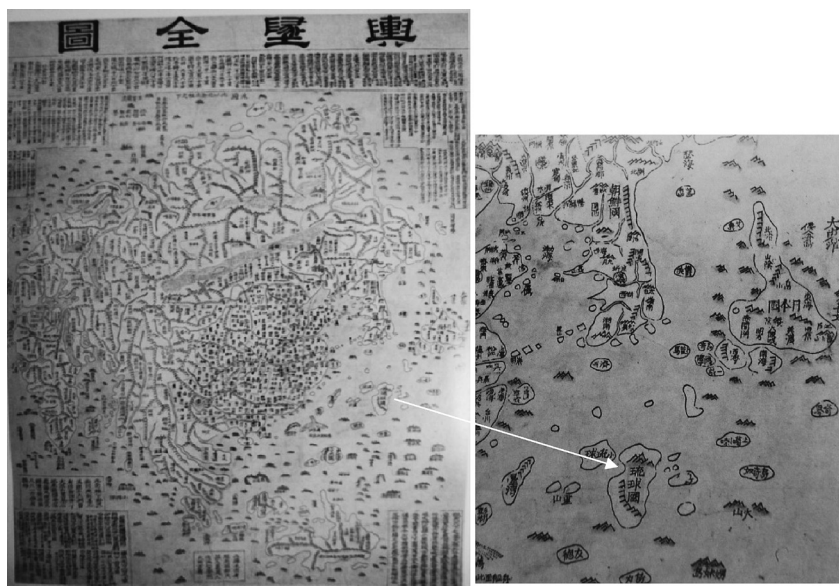


図 1-3 輿地全図，木版本，18 世紀末期，85.5×59.0 cm
(出所：崇實大学校博物館所蔵)

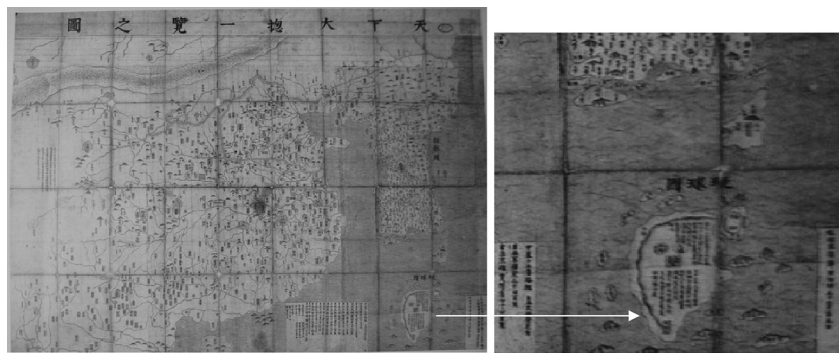


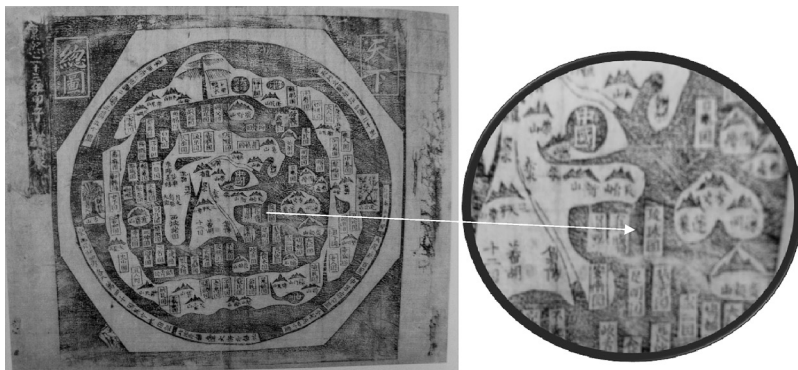
図 1-4 「天下大摺一覽之図」18 世紀初期，128×155.0 cm.
(出所：韓国国立中央図書館所蔵)

そのことを明確に見せているのが、「天下図」である。朝鮮王朝の官主導の世界地図とは異なり、「天下図」は想像や世界観そのものを描いた地図である。「天下図」が多く残されているのは朝鮮後期である。18世紀までの「天下図」が描かれた地図は多数存在しており、琉球関連地図を見つけるのはそれほど困難なことではない。「天下図」は、図I-5、図I-6のように円内部に世界を描いた円形天下図で、円のなかに中央大陸とそれを囲むかのような環大陸を描き、その間に内海を描きながら、中に多くの島を散在して描くのが典型的である。

図I-7のように、18世紀の天下図のなかには、中央大陸には実在の国を、それを囲む環大陸には想像の国々が描かれている場合もある。いずれの場合にも「山海経」などの仮象の国々が描かれている。このような「天下図」は、多くは著者と年代が不明で、制作者の意図により多様な形と内容があるが、韓国古地図学分野の代表的な研究者李燦の分析によると、イギリス大英博物館に所蔵されている天下図の中にはおよそ126の島々が描かれており、そのなかで実存する国名は、中国と朝鮮以外には日本国と琉球国のみである⁶⁵。

図I-8のように天下図の中には、日本国と琉球国を天下図の中に描いた上、それを取り出して拡大する形で描いたものもあるが、日本国本島の大きさとはほぼ同じ大きさで琉球国が描かれているものもある。

18世紀前半に描かれた天下図のなかで、琉球との交隣関係を伺わせる図一つを紹介しよう。「琉球国図」(図I-9)には、島々の全体は簡略化させたうえ、島全体に首里城が描いている。歓会門のほか、漏剋門、奉神殿などが正確に配され、左下には冊封使の宿舎であった「天使館」(図の中央)が正確に描かれている。図I-9には、朝鮮王朝の許荷谷が琉球国通使であった張主簿との対話を記録したもので、張主簿は琉球国の国王の姓が尙氏であることや、東海から琉球の境界に至るまでの距離などを話している。許荷谷は、朝鮮後期に書かれた最初のハングル小説「洪吉童伝」の著者許筠の兄で、琉球使臣を接待するなど直接交流のあった人物である⁶⁶。ハングル小説「洪吉童伝」は、理想国として「律道国」を建てた英雄の物語である。洪吉童は庶子として生まれた。身分制度に堅く縛られた朝鮮時代に、貴族として生まれたにしても庶子であった身分は、洪吉童に官僚への道に進むことを許さなかった。文・武とも才能を持った洪吉童は、結局、腐敗した官僚の物を盗み庶民に配布し、さらに理



図I-5 「天下総図」木版本, 1684年, 32.5×31.5 cm.
(出所: 李燦所蔵)

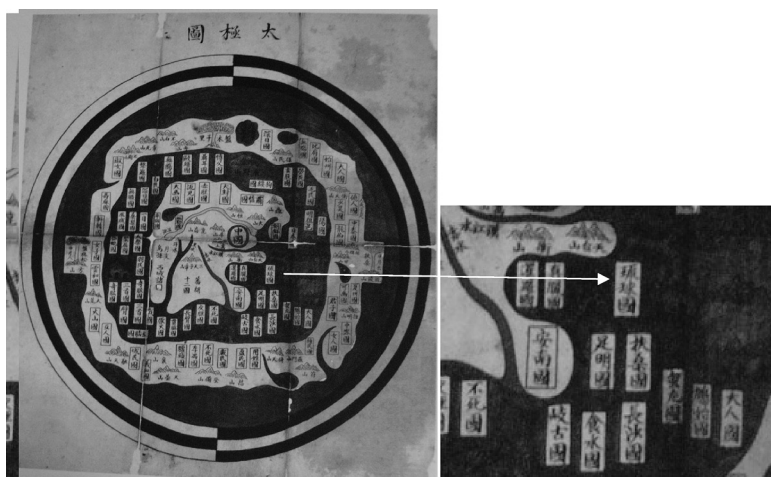


図 1-6 「太極図」彩色筆写，18 世紀中葉，36.5×30.0 cm.

(出所：嶺南大学校博物館所蔵)

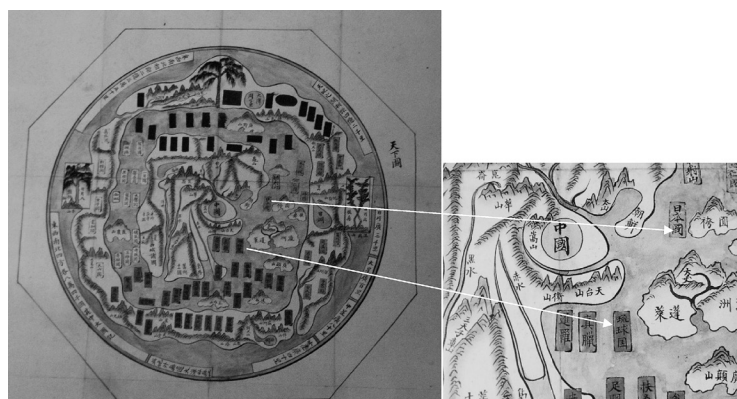


図 1-7 「天下図」18 世紀後半，51.2×53.4 cm.

(出所：嶺南大学校博物館所蔵)

想国を建てる。このような内容の小説であった。ところが、近年、小説「洪吉童伝」の著者許筠が、前述した「天下図」で記入された文書のように、許筠の家族ともに「琉球」との関係が密接であった朝鮮官僚であったことや、朝鮮王朝実録の分析などを通して小説の人物洪吉童が、琉球史に実在する人物、遠弥計赤峰保武川良（おやけあかはちほんがわら）と同一人物であるという学説も発表された⁶⁷。

小説の人物が実存する人物であるかどうかはともあれ、許筠が琉球との関連で非運にみまわれたことは『朝鮮王朝実録』に記されている。1613 年（光海 5 年）、「済州の地方官（李箕實・文希賢）が、中国・日本・琉球 3 国の人を乗る漂流船の積み荷を奪い、全員殺したことにに関して処罰を下した」という記録がある⁶⁸。その後、殺されたのは琉球の王子で、琉球が軍隊を送り、済州に復讐しようとし

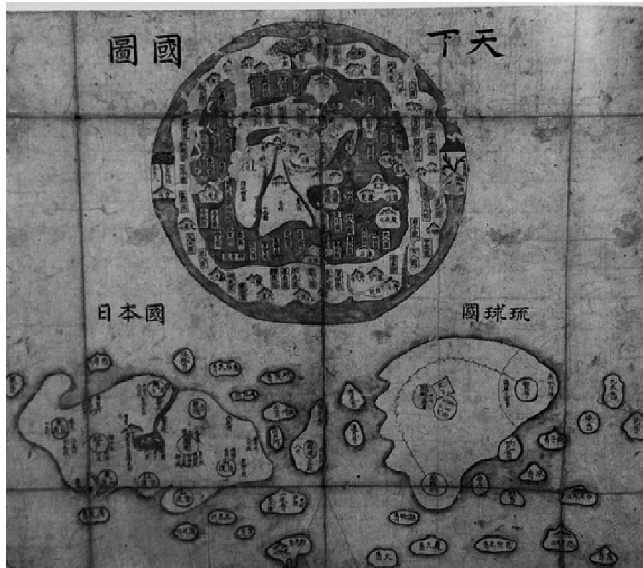


図 1-8 「天下国図」彩色筆写, 18 世紀, 50.5×56.5 cm.
(出所: 湖巖美術館所蔵)

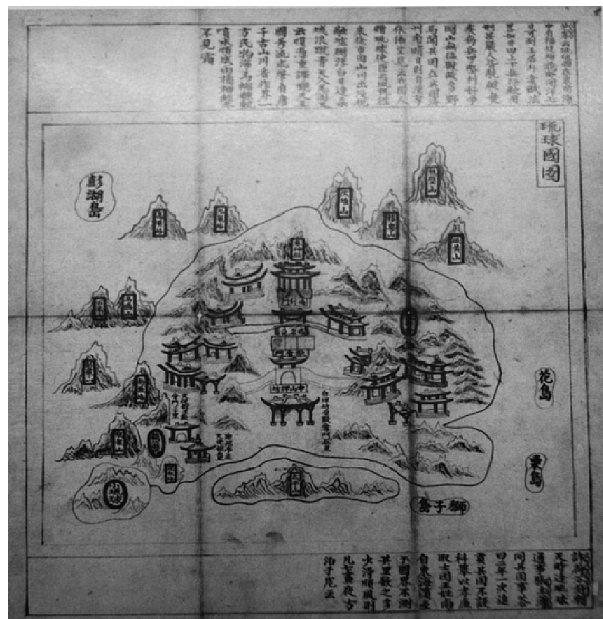


図 1-9 『琉球国図』天下地図, 彩色筆写, 18 世紀前半, 36.5×30.0 cm.
(出所: 嶺南大学校博物館所蔵)

ているとのうわさが広まった⁶⁹。済州から琉球に漂流した人々の多くは、済州島出身であることを隠していたことなどから、この噂はかなり浸透していたとみられる。許筠は、琉球が復讐のために送った兵が海島に隠れているという噂を流したとして反逆罪に問われ⁷⁰、自白の署名を強いられたのち死

刑にされたのである⁷¹。許筠や彼の小説「洪吉童伝」が諷刺した時代は、民衆の中で身分制度についての不満が最も高まった時期であったし、かつ、薩摩によって「琉球処分」が行われた時期とも重なる。『朝鮮王朝実録』には、薩摩が琉球国を滅ぼしたことや琉球国王が捕虜となったことなどが記されていることから、朝鮮王朝が琉球処分の事実を5年後には把握していたことが分かる⁷²。

薩摩の侵略後、『朝鮮王朝実録』から琉球関連記事が急速に減る。漂流記も1714年の珍島郡からの9人の漂流記録以外には、送還事実に対する簡略な言及に留まり、詳しい情報収集の痕跡は見当たらない。しかし、琉球の漂流民送還は19世紀まで続いたし、朝鮮朝廷とは異なり実学者や地方に流配された知識人による漂流民の記録が目立つのは、むしろ朝鮮後期であった。しかし、漂流民には薩摩侵略後、琉球が強いられた劇的な変動は伝わることはなかった。むしろ、異例ともいえるべき琉球の漂流民に対する待遇の良さは、ある種の理想的な国として琉球のイメージを作ることに役立った。

おわりに

朝鮮前期は、被擄人や漂流民の送還を名目に行われた直接交流で、物や人の交換を通して実存する国としての琉球を認識していったとするなら、後期は、外交文書の交換はすでに17世紀半ばには途絶えてしまったものの、漂流民送還を通して関係が存続した時期であった。また、朝鮮に残った多くの世界地図で見える限り、琉球王国ははっきりとした存在感を持っており、徐々に思想や世界観を描いた地図として抽象化されていった過程においても存在し続けていったと考える。そして、長い間地図上に残っている「琉球像」、つまり、理想的な国としてのイメージとは、科学的な形で官が管理する地図ではなく、木版印刷術の発展に伴い一般にも広く伝わった「天下図」のように民間に広まったイメージであった。そしてそのイメージは、両国の公的な関係が事実上、途絶えたにもかかわらず、まるで「おどぎ話」のように朝鮮の民間に広まったのである。

周知の通り、琉球を通過して日本に向かったペリーは、日本を開国させた。日本は1875年ロシアと樺太・千島交換条約を締結し、1876年には小笠原諸島の管理統治をアメリカやイギリスをはじめとする列強に宣言した。さらに、1879年には、「琉球処分」を行い、琉球を日本国の沖縄県として統合する。琉球王国の運命の別れ道であった「琉球処分」とは、朝鮮から考えると『琉球王国評定所文書』（浦添市教育委員会、1988年～2001年）の筆写版に残る漂流民の最後の記録（1868年）から、わずか10年余りのことであり、それまでの朝鮮と琉球の間の人間の顔の見える「前近代の交流史」の終焉を意味するものであった。そして「琉球処分」を行った日本は、1905年ついにロシアに勝利したのち、続く1910年に朝鮮を「併合」することに成功した。沖縄や朝鮮の王国の終焉や近代への営みは、日本国の植民地支配の拡大への一連の過程の中に位置づけられるものであったといえよう。そして、本論文で見てきたように、人間の顔の見える「前近代の交流史」が終焉を迎えてから、むしろ、朝鮮では琉球という「幻想」が広まっていった。前近代の朝鮮と琉球との交流史は、その意味で、沖縄人と朝鮮人の関係の起源であり、また、両地域の関係史が近代日本との関係の中で分岐点に達した時期であったといえよう。

註

- ¹ 『歴代宝案』に見られる最後の記述は 1638 年である。
- ² 洪珖伸「第二章：韓国における沖縄学の現在—弁子（ゆうぐう）と昇子（りゅうきゅう）」の間』（富山一廊・森宣雄 編『現代沖縄の歴史経験』、青弓社、2010 年、89-127 頁）を参照されたい。
- ³ 琉球側の史料に関しては、本史料集では 1987 年に刊行された『沖縄県史料（5 巻）前近代漂着関係記録』の収録したものをそのまま載せている。また、『琉球国評定所文書』は、史料集の編纂当時（1997 年 6 月）沖縄県浦添市教育委員会が刊行した 12 冊の史料集を参考としているが、『琉球国評定所文書』は現在（2011 年）18 冊まで刊行されており、琉球側の史料は、沖縄で刊行された史料を合わせて参照する必要がある。
- ⁴ 例えば、世宗二十七年二月丁卯（二月二三日）に琉球使臣李藝の死に関して、朝鮮王朝実録には、その誕生、業績、死まで全経歴を記す文章を載せているが、『原文編』には琉球関連事項を中心に簡単に略されている。
- ⁵ 李元淳『『歴代宝案』を通してみる朝鮮前期の朝琉関係—直接通交期を中心に』国史編纂委員会『国史館論叢 [韓国] 第 65 号、1995 年 12 月、4-5 頁。
- ⁶ 鄭成一「朝鮮と琉球の交易」『朝鮮と琉球』[韓国]、デウ学術総書、アルケ出版、1999 年、131 頁、孫承喆「韓・琉交隣体制の構造と特徴」同書、30 頁参照。
- ⁷ 韓相復『海洋学から見た韓国学』[韓国]、海潮社、1988 年、61 頁。
- ⁸ トメ・ピレス『東方諸国記』生田滋他訳注、岩波書店、1966 年、17-21 頁参照。
- ⁹ 同上、248 頁。
- ¹⁰ 同上、249 頁、訳注 1 を参照。
- ¹¹ 韓相復、前掲書、129-131 頁。
- ¹² 田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会、1975 年、296 頁参照。
- ¹³ 李薫「人的交流を通して見る朝鮮・琉球関係—被擄人・漂流民を中心に」『朝鮮と琉球』前掲書、192-193 頁参照。
- ¹⁴ 同上、201-203 頁。
- ¹⁵ 『高麗史』、巻 137、列伝巻 50、辛禰 5（1389 年 8 月）
- ¹⁶ 『高麗史』巻 45、世家巻 45、恭讓王 2 年 8 月丁亥（1390 年 8 月 28 日）
- ¹⁷ 『朝鮮王朝実録』太祖実録、太祖元年 8 月丁卯（1392 年 8 月 18 日）
- ¹⁸ 『海東諸国紀』『琉球国紀』道里里數：海東諸国紀は目次の次に凡例を備えており、そこには道は日本の里数を使っており、日本の 1 里は朝鮮の 10 里に当たると書かれている。
- ¹⁹ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 12 月乙亥（1429 年 12 月 3 日）
- ²⁰ 河字鳳「朝鮮初期の対琉球関係」『国史館論叢』[韓国]、第 59 号、1994 年、pp151-152。
- ²¹ 『朝鮮王朝実録』太宗実録、太宗 16 年正月庚申（1416 年 1 月 27 日）
- ²² 太宗 16 年 7 月壬子（1416 年 7 月 23 日）：慶尚道咸昌郡の金彦忠は、太祖 4 年（1395 年）14 才で被擄人として転売され、太宗 16 年（1416 年）35 才でようやく朝鮮に戻された。
- ²³ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 8 月己丑（1429 年 8 月 15 日）
- ²⁴ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 8 月壬寅（1429 年 8 月 28 日）
- ²⁵ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 9 月己酉（1429 年 9 月 6 日）
- ²⁶ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 9 月壬辰（1429 年 9 月 29 日）
- ²⁷ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 12 月壬戌（1430 年 12 月 26 日）
- ²⁸ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 13 年 10 月丙午（1431 年 10 月 15 日）
- ²⁹ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 13 年 11 月庚午（1431 年 11 月 9 日）
- ³⁰ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 11 年 12 月乙亥（1429 年 12 月 3 日）
- ³¹ 東恩納寛惇『琉球の歴史』[日本歴史新書]、至文堂、1957 年、p47。
- ³² 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 13 年 11 月庚午（1431 年 11 月 9 日）：尚巴志の親書を持ってきた琉球王国の遣使たちが訪問したのが、明に対する冬至朝賀の式があったため、行事参加の際の格位の議論があった。世宗は対等の国であるため従二品を与えたらどうかなどを提案するが、黄喜などの閣僚により、日本と同じ従三品にすることが正しいとされた。琉球が日本よりも小国であるとの理由であった。このことに関しては早くから東恩納寛惇（『黎明期の海外交通史』帝国教育出版社、1941 年、pp49-55）が注目し詳しい内容紹介を行っている。
- ³³ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 12 年 5 月戊午（1430 年 5 月 19 日）
- ³⁴ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 15 年 7 月癸酉（1433 年 7 月 22 日）
- ³⁵ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 16 年 3 月丁酉（1434 年 3 月 20 日）
- ³⁶ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 16 年 3 月乙未（1434 年 3 月 18 日）
『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 16 年 9 月丁酉（1434 年 9 月 23 日）
- ³⁷ 『朝鮮王朝実録』世宗実録、世宗 19 年 11 月癸丑（1437 年 11 月 27 日）：司諫院には漢学・蒙学・女真学・倭学の生徒が置かれ、倭学生は 15 名であった。（『朝鮮王朝実録琉球史料集成訳注編』、82 頁、訳注 1 参照）

- ³⁸ 代表的な先行研究として、河宇鳳「朝鮮初期の対琉球関係」（『国史館論叢』第 59 号、前掲論文）田中健夫『中世対外関係史』（東京大学出版会、1975 年）があげられる。
- ³⁹ 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』前掲書、53 頁。
- ⁴⁰ 田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会、1975 年、294 頁。
- ⁴¹ 漂流民を送還すると、交易の機会を増やすことが出来、朝鮮王朝から贈物を授与され、かつ使者の正当性を保つことができた。そのため、漂流民の送還は一度にまとめて行われず小さい規模で複数行われる場合が目立つ。
- ⁴² 河宇鳳、前掲論文、135 頁。
- ⁴³ 鄭成一、前掲論文、150-155 頁参照。
- ⁴⁴ 『朝鮮王朝実録』成宗実録、成宗 16 年 10 月戊子（1485 年 10 月 11 日）
- ⁴⁵ 『朝鮮王朝実録』成宗実録、成宗 17 年 8 月辛卯（1486 年 8 月 19 日）
- ⁴⁶ 鄭成一、前掲論文、167-171 頁参照。
- ⁴⁷ 『朝鮮王朝実録』成宗実録、成宗 13 年 2 月壬子（1482 年 2 月 13 日）
- ⁴⁸ 嶺南博物館『嶺南博物館所蔵韓国の古地図（図版編）』[韓国]、嶺南博物館、1998 年、188-191 頁。
- ⁴⁹ 李燦編『汎友社創立 25 週年記念出版図書—韓国の古地図』、汎友社、1991 年、366 頁。
- ⁵⁰ 国史編纂委員会『韓国史 26 朝鮮初期の文化 1』[韓国]、政府刊行物、1995 年、201 頁。
- ⁵¹ 同上、202 頁。
- ⁵² 『朝鮮王朝実録』魯山君日記、端宗元年 7 月己未（1453 年 7 月 4 日）
- ⁵³ 『朝鮮王朝実録』世祖 5 年正月癸巳（1459 年 1 月 10 日）
- ⁵⁴ 『朝鮮王朝実録』世祖 5 年正月戊戌（1459 年 1 月 15 日）
- ⁵⁵ 『朝鮮王朝実録』魯山君日記、端宗元年 7 月己未（1453 年 7 月 4 日）
- ⁵⁶ 申叔舟・姜沆『韓国名著大全集—海東諸国紀、看羊録』[韓国]、李乙浩訳、大洋書籍、1973 年、12 頁。
- ⁵⁷ 表音文字である訓民正音（ハングル）は、創始するにあたって多くの外国語を参考にした研究が重ねられたが、申叔舟は、明の学者の黄瓚を 13 回も訪ね音韻に対する論議を重ねることで貢献した学者であった。（申叔舟・姜沆、前掲書、12 頁参照）
- ⁵⁸ 李元淳「歴代宝案」を通してみる朝鮮前期の朝琉関係—直接通交期を中心に」『国史館論叢』[韓国] 第 65 号、1995 年 12 月、14 頁。
- ⁵⁹ 国史編纂委員会『韓国史 26—朝鮮初期の文化 1』[韓国] 韓国政府刊行物、1995 年 12 月、201 頁参照。
- ⁶⁰ 朝鮮王朝の六曹のなかの一つであった禮曹は、他にも礼学・祭祀・朝聘・科举・館服を掌る。禮曹が編纂した『漂人領来謄録』は日本に漂着した朝鮮人の記録だけを編纂しているものであるが、そのなかには琉球に漂着した朝鮮人の送還事例が 3 件収録されている。本章では詳しく扱わないが、禮曹の史料を含む漂流民の送還システムの分析は重要である。近年、このことを含む優れた研究が発表されているので参照されたい。（李薰『朝鮮後期漂流民と日朝関係』池内敏訳、法制大学出版局、2008 年）
- ⁶¹ 海野一隆「辺境図の変遷」『日本古地図大成』講談社、1972 年、39 頁。
- ⁶² 『朝鮮王朝実録』燕山 7 年正月辛未（1501 年 1 月 22 日）朝琉関係史で朝鮮と琉球の直接外交関係は、朝鮮太祖元年（1392 年）から燕山君 6 年（1500 年）までの 108 年間とされている。『海東諸国紀』の補充は、直接外交関係が終わった翌年であった。
- ⁶³ 李燦編『汎友社創立 25 週年記念出版図書—韓国の古地図』、汎友社、1991 年、339 頁。
- ⁶⁴ 同上、341-342 頁参照。
- ⁶⁵ 同上、344-345 頁。
- ⁶⁶ 薛盛璟『韓国探求 27—洪吉童伝の秘密』[韓国]、ソウル大学出版部、2004 年 301-302 頁。
- ⁶⁷ 同上。
- ⁶⁸ 『朝鮮王朝実録』光海君日記、光海 5 年 1 月丙戌（1613 年 1 月 28 日）
- ⁶⁹ 『朝鮮王朝実録』仁祖実録元年 4 月癸酉
- ⁷⁰ 『朝鮮王朝実録』光海君日記、光海 10 年 8 月戊寅（1618 年 8 月 22 日）
- ⁷¹ 『朝鮮王朝実録』光海君日記、光海 10 年 8 月庚辰（1618 年 8 月 24 日）
- ⁷² 『朝鮮王朝実録』光海君日記、光海 5 年 5 月乙丑（1613 年 5 月 8 日）